

昭和初期における私立高等教育機関の拡張事業

—文部省普通学務局報告書から—

Extension works of private higher education institutions in the early Showa era:

From a report of ministry of education, general educational affairs bureau

山本 珠美
Tamami YAMAMOTO

1. はじめに～問題の所在～

日本では一部私学の講義録の取組を除けば欧米のUniversity Extension（大学拡張）に類する運動・実践は存在しないという言説が一般的であったが、近年の研究により帝国大学をはじめとする官立高等教育機関で実施された拡張事業については明らかになりつつある。一方、私立高等教育機関については、講義録こそ大学史研究で言及されるものの、その他の取組も含めた全貌が明らかになっているとは言い難い。

本稿は、文部省普通学務局『成人教育実施概要：昭和三年度』の第三部「直轄学校・公私立大学・高等学校・専門学校ニ於ケル学校拡張事業実施状況」（以下、「実施状況」と略）を手がかりに、私立高等教育機関が戦前実施していた多様な拡張事業の一端を明らかにするものである。この「実施状況」は、含まれてしかるべき事業が含まれていないなど、データが不完全であるという欠陥があるのだが、官公私立高等教育機関が文部省委嘱ではなく自主的に実施した拡張事業が一覧になっている数少ない貴重な資料であることもまた事実である。

以下、はじめに「実施状況」で取り上げられた私学17校の取組状況を概観し、続いてその中から官立校にはない特徴的な取組である仏教系私学の伝道としての拡張事業と、慶應義塾大学医学部の拡張事業として長く取り組まれながらこれまでほとんど注目されていない慶應海外医事研究会通俗医学講座について詳しく述べる。

2. 「実施状況」～私学17校の取組～

(1) 調査実施の背景

「実施状況」の調査が行われた背景については、冒頭で次のように述べられている。

社会の文運日に多岐複雑を極めむとする時世に於ては、学校教育の圈内より進出して直接社会と接触し、民衆教化の為教育事業の拡張を図り、学校設備を利用便益に供し、或は之が為に特別の講座又は指導研究会を設け、或は調査研究の結果を発表し、之によりて積極的に一般民衆の知徳を啓培し、広く教育の機会均等の実を挙げて以て社会一般の向上発達に貢献せむとする学校拡張事業は啻に民衆の要望する処のみならず、方に時代に喫緊なる施設事業なり（文部省普通学務局 1929、p.187）。

文部省が同様の趣旨の文書を発したのは、明治39年普通学務局長による地方長官宛の通牒「通俗教育ニ関スル件」に遡る。しかし、本件「実施状況」に関しては、直接的には大正8年普通学務局に通俗教育（社会教育）を専管する第四課が新設された際に初代課長となった乗杉嘉壽の影響が大きい。乗杉は課長在任中に著した『社会教育の研究』の中で「学校は、限られたる場所として限られたる生徒にのみ使用される許りでなく、学校の有する総ての意義や設備材料が、学校の壁を越えて、広く社会に及ぶことが甚だ必要である。」（乗杉1923、p.15）と述べ、直轄学校に委嘱して成人を教育対象とする文部省主催成人教育講座を開始した。成人教育講座は乗杉が松江高等学校に転出した後の大正15年に拡充され昭和17年まで続いたが、ほぼ毎年刊行された『成人教育実施概要』（題名は年度により多少異なる）の主たる刊行目的は、この成人教育講座の実施報告であった。本稿で取り上げる昭和3年度の『成人教育実施概要』も、第一部は文部省主催成人教育講座である（ちなみに、第二部は道府県の実施する成人教育の状況報告である）。

ただし、成人教育講座は文部省委嘱による官立校の取組である。委嘱を受けず各校が自主的に実施している取組、また、官立ではなく公私立学校の取組にどのようなものがあるのか。これを調べるのが「実施状況」調査の目的であった。

(2) 調査対象・方法

「実施状況」の調査対象および方法については、(1) の引用箇所が続いて、次のように述べられている。

昭和二年度の直轄学校・公私立大学・高等学校・専門学校に於ける学校拡張事業施設の状況に関しては、年齢概ね男子は二十才以上、女子は十八才以上の学校を圍繞せる一般成人を対象とし、学校当局のみならず学生生徒の事業に就き、百十三校の各学校長に対し照会を發し、之が回答報告中にて調査に該当する五十六校の学校拡張事業実施概要は左記の如し（同上）。

調査対象は、①一般成人（男子20歳以上、女子18歳以上）を対象とする事業で、②学校当局のみならず学生生徒の行う事業も含む、となっている。そして、調査方法は、113校の各学校長に照会をかけた（回答結果のうち、56校が調査趣旨に該当した）ということである。

「実施状況」の抱える第一の問題は、照会をかけた113校がどの学校か不明な点である。昭和2年度の文部省年報によると、官公私立高等教育機関は、大学37校（帝国5、官立6、公立4、私立22）、高等学校31校（官立25、公立2、私立4）、専門学校97校（官立7、公立5、私立85）、実業専門学校50校（官立44、公立2、私立4）、高等師範学校2校（いずれも官立）、女子高等師範学校2校（いずれも官立）のあわせて219校であるから、半数強にしか照会していないことになる。また、第二の問題として、昭和2年度調査であるにもかかわらず、日時や講師等、当該年度の具体的内容ではなく、例年の実施形態を回答した学校も少なくなく、空欄や概数での回答も目立つ点である。このように調査方法に厳密さが欠けており、結果分析には慎重にならざるを得ないことは否めない。

（3）掲載校の概要

「実施状況」に列挙された56校は表1のとおりの内訳で¹⁾、官立37校（大学4校、高等学校9校、専門学校3校、実業専門学校20校、高等師範学校1校）、公立2校（大学1校、専門学校1校）、私立17校（大学7校、専門学校8校、実業専門学校2校）である。（2）で述べたとおり、そもそも調査が網羅的ではないため、これをもって当時の実施傾向を判断することはできないが、「文部省普通学務局が把握していた限り」という条件をつけて語るならば、官立実業専門学校が20校と多いことが分かる²⁾。そして、拡張事業は官立校ばかりではなく、公立校や私立校でも実施されていたことがわかる。

表1 学校拡張事業実施概要の掲載校内訳

官立	37校	[大学(4)] 東京帝国、京都帝国、九州帝国、岡山医科
		[高等学校(9)] 第二、第四、第七、山口、松山、松江、静岡、高知、姫路
		[専門学校(3)] 東京外国語、東京美術、富山薬学
		[実業専門学校(20)] 東京高工、大阪高工、桐生高工、金沢高工、徳島高工、長岡高工、鳥取高農、三重高農、宇都宮高農、岐阜高農、長崎高商、山口高商、小樽高商、福島高商、大分高商、彦根高商、和歌山高商、横浜高商、高松高商、高岡高商
		[高等師範学校(1)] 奈良女子
公立	2校	[大学(1)] 大阪医科
		[専門学校(1)] 京都市立絵画
私立	17校	[大学(7)] 慶應義塾、早稲田、龍谷、大谷、立正、駒澤、高野山
		[専門学校(8)] 東洋大学、青山学院、大日本武徳会武道、佛教、東京物理、京都薬学、東京女子、帝国女子薬学
		[実業専門学校(2)] 大倉高商、東京写真

(4) 私立高等教育機関の拡張事業

表2は私立校で具体的にどのような拡張事業を行っていたかを一覧にまとめたものである。官公私立問わず、当時の拡張事業は、大学等そのものに公衆を招き入れる「学内型」として (A) 通俗講談会 (聴講資格なし)、(B) 講習会 (聴講資格あり)、(C) 施設公開、大学等の立地場所から離れて学外に出向く「学外型」として (D) 通信教育、(E) 巡回講演、(F) セツルメントに分類できるが³⁾、表右欄にはそれぞれの取組がどのタイプに該当するか、記号を記載している。

表2 私立高等教育機関の拡張事業概要

	校名 (現在の校名)	事業の名称等	タイプ
大学	慶應義塾大学	慶應義塾大学巡回講演会	E
		慶應義塾大学弁論部巡回講演会	E
		慶應海外医事研究会通俗医学講座	A
		慶應海外医事研究会地方通俗医学講座	E
	早稲田大学	早稲田大学校外教育部夏期講習会および巡回講演	A,D,E
		早稲田大学出版部講義録 (政治経済科、法律科、文学科、電気工学科、中学、商業、高等女学)	D
		早稲田大学記念公開講演会	A
	龍谷大学	龍谷大学拡張講座	E
	大谷大学	大谷大学地方同窓学生主催 大谷大学講座	E
	立正大学	立正大学歴史地理科講習会 (夏期、冬期)	B
		立正大学国語漢文科講習会 (夏期、冬期)	B
	駒澤大学	駒澤大学庶民大学日曜講座	A
	高野山大学	高野山大学学友会主催 春秋季灌頂伝導講演会	A
		高野山大学学友会主催 出張公開講演会	E
専門学校・実業専門学校	東洋大学	東洋大学夏期大学	A
	青山学院 (青山学院大学)	青山学院英語講習会	B
	大日本武徳会 武道専門学校 (廃校)	大日本武徳会武道専門学校科外生理衛生講義	(注)
	佛教専門学校 (佛教大学)	佛教専門学校講演部夏期伝導	E
	東京物理学校 (東京理科大学)	東京物理学校巡回夏期講習会	E
	京都薬学専門学校 (京都薬科大学)	京都薬学専門学校生徒協同主催 展覧会 (和漢薬、薬化学、分析化学、調剤学、売薬)	C
	東京女子専門学校 (東京家政大学)	東京女子専門学校復興記念ストーン式洋服裁縫講習会	B
	帝国女子薬学専門学校 (大阪薬科大学)	帝国女子薬学専門学校学術講演会	A
	大倉高等商業学校 (東京経済大学)	山口高商東亜経済研究会・大倉高商東亜事情研究会共同主催 支那事情講習会	A
		大倉高等商業学校校友会弁論部巡回講演会	E
		大倉高等商業学校広告研究会ポスター展覧会	C
	東京写真専門学校 (東京工芸大学)	東京写真専門学校夏期写真講習会	B

(注) 京都帝国大学助教授が毎週土曜日に一般生理衛生に関して講義したもので、AかBと思われるが、詳細不明。

表2からは(A)通俗講談会と(E)巡回講演が多いことが見て取れるが、他に類を見ない取組として異彩を放っているのが(D)通信教育に該当する早稲田大学の夏期講習会・巡回講演と講義録であろう⁴⁾。前身の東京専門学校時代から行われている取組で、講義録は明治19年の政学講義会の事業に、夏期講習会・巡回講演の前身と位置づけられる地方巡回講話は明治26年8月にそれぞれ遡る。東京専門学校は明治20年代すでにこの2本柱からなる取組を「ユニヴァーシティ・エクステンション」と認識して取り組んできたのであるが、明治43年に校外教育部が新設されると、同部が巡回教育を担当し、早稲田大学出版部(元は東京専門学校出版部)が講義録を発行するという形が完成し、大学として一層組織的な取組となった(夏期講習会は早稲田大学内でも実施し、かつ夏期講習会・巡回講演は講義録を購読する校外生対象であると同時に一般公衆も聴講することができたので、ADEの3側面あった)。

そのほか、(B)講習会に当たるものとして、中等学校教員および一般有志のため英語、英文学、英語教授法の講習を実施した青山学院⁵⁾、同じく中等学校教員に男子洋服の裁縫法について講習した東京女子専門学校⁶⁾、写真師に写真の学理と技術を会得させる目的で講習会を行った東京写真専門学校⁷⁾などは、各校の特徴をいかした拡張事業であると言えよう。

3. 仏教系私学～伝道としての拡張事業～

「実施状況」に挙げられた私学17校のうち、慶應義塾と早稲田を除く大学5校(龍谷、大谷、立正、駒澤、高野山)と佛教専門学校の6校は仏教系である。このうち立正大学こそ宗教色が見られないものの⁸⁾、残り5校の取組は仏教の伝道を目的としたものあることが明らかである。これは官立校には見られない特徴である。

例えば、駒澤大学では6月から翌年3月まで、年間を通して計28回、庶民大学日曜講座が開催されている。日曜日の午前中約2～3時間、一人もしくは二人の教授らがそれぞれの専門分野について講演するというものである。主には駒澤大学教授が講師を担当し、仏教学者の山上曹源や大森知言は常連講師であったが、昭和2年度は前東京帝国大学文学部教授で当時衆議院議員であった建部遯吾(社会学)が3度、東京帝国大学文学部教授の吉田静致(倫理学)は2度、登壇している。聴講者は毎回約70～80名(ほぼ男性、女性は5～6名程度)だったという。

そもそもこの庶民大学日曜講座は大正14年の大学昇格を記念して開設されたもので、読売新聞(大正14年11月9日)には次のように報じられている。

同大学では今月から一般のために大学を解放すること、し毎日曜庶民大学講座を開設した。講師は、学長忽滑谷快天博士をはじめ、諸教授総動員のもとに行はれるが、信仰、思想、社会諸問題に対して、的確な解決を与ふべくさかんな意気込みである。聴講料は徴収せず来聴を歓迎すと。

さらに、読売新聞（大正14年12月3日）の「読者の声」欄には、庶民大学に参加した人の投書が掲載されている（原文ママ）。

庶民大学に感謝す

宗教なるものが人間社会から遠ざかった所謂超然的のものであったならば、それは吾々の宗教として、人間の宗教として何等の価値も権威もない事は、此処に事新しく言ふを要しないが、不幸にも従来の宗教には、それ等の香が無いでもなかった。それに引き変へ、近頃の一般人の宗教に対する理解宗教的価値の何たるかに目覚めた有様が、日増しに深く広くなって来たと言ふ事は、事を知る何人もが肯定する所である、つまり、あまりの世智がらさに驚ろかされ、代る代る其の跡を継いで出て来る幻滅の悲哀に泣き壊れ、絶えざる不安から遁れ出ようとしたのが、即ち人間のものとしての宗教の欲求である。之等に対して、即ち之等人間の欲求に対して共に語り、そして共に真宗の人間生活を味はんとして駒澤大学庶民講座の生れたのは嬉しい。商い人、婦人等がノートを手にして這入って来るのを見る時、何とも言へない愉快さが胸をおほふのである、更に講座の前後、休みの時間等には、尚大学音楽部の諸氏によって宗教音楽が奏せられて、一層意が深い。

斯うしたことは尚大学の為のみならず、一般人間社会の為として喜び、感謝し、双手を挙げて賛意を表するものである。

大正11年に大学令による大学となった龍谷大学は、駒澤大学より半年ほど早い大正13年11月に、神戸で第一回拡張講座を開始した（龍谷大学三百五十年史編集委員会2000、p.1339）。昭和2年度は大阪と名古屋で2回実施している。一回目は昭和2年11月1日～25日、毎週火曜日と金曜日の午後7時～10時、大阪市の相愛高等女学校にて「真宗学概論」（7時間半）、「仏教学概論」（9時間）、「社会哲学」（7時間半）の3科目を開講した。講師は龍谷大学の教授陣、聴講者は200名（男性167名、女性33名）、聴講料3円、経費700円余だった。二回目は昭和3年3月9日～11日、午後7時～10時、名古屋市の和敬会館にて「浄土真宗の根本義」「仏教空思想概論」「宗教の本質」の3科目（いずれも3時間）、講師は龍谷大学教授陣、聴講者171名（男性123名、女性48名）、聴講料1円、経費200円余であった。

駒澤大学と龍谷大学は、大学主催で開催し、講師は主に大学教授であったが、高野山大学、大谷大学、佛教専門学校は学友会（校友会）等が主催者であり、教授のみならず学生も講師を務める場合があった。

高野山大学は学友会講演部の主催で春秋季灌頂伝道講演会および出張公開講演会を開催していた。そもそも学友会講演部は、前身時代から布教伝道を活動の柱としている組織であった。すなわち、明治38年発足の三密会（学友会の前身）は、弁論部、雑誌部、体育部の三部からなり、弁論部は学内討論会のほか、路傍伝道、地方伝道を行っていた。大正3年に三密会が三密会大学部となった際には弁論部を布教部と改め地方伝道に力を注いだが、大正5年に学友会と名称を改め再発足することになると、新たに設けられた講演部がそれまでの布教伝道に関する事業を引き継ぐことになった

(高野山大学1986、pp.476-494)。高野山大学は大正15年に大学令による昇格を果たしたが、昭和初期、校友会講演部は明治・大正期以来の布教伝道活動をさらに発展させ、教授引率のもと、学生数名が北海道、九州、沖縄、台湾各地にて伝道＝巡回講演（出張公開講演会）を行った（同上、pp.523-528）。

同様に、佛教専門学校も校友会講演部が夏期伝道として「地方見学ヲ兼ネ毎年暑中休暇ヲ利用シ比較的遠方ニ出張」（文部省普通学務局1929、p.219）していた。会場はおおむね各地の寺院で、行き先により日数は異なるが概ね10日間程度、講演部員中の弁舌優秀な者が派遣されたというが、興味深いのはそれにかかる経費に関する記述である。「一地ヨリ一地方寺院ヨリ寄付サレ（宿泊も同ジ）照会通信費位ノ外ニ経費ヲ要セズ」（同上）とあり、寺院の寄付が大きかったことがわかる。なお、佛教専門学校の校友会は、その前身である宗教大学分校時代の明治43年に結成されたものだが、大正2年に佛教専門学校と改称されると新しい校友会会則が制定され、その第四条に「一 法演部 定期及臨時ニ布教伝道ヲナシ（以下略）」と規定されていた（仏教大学史編集委員会1972、p.147）。講演部となってからも、伝道の伝統は継承された。

大谷大学の場合は校友会（校友会）ではなく「地方同窓学生主催」である点⁹⁾、講師は学長村上専精をはじめいずれも大学教授であって学生は含まれない点で、高野山大学・佛教専門学校とはやや様相を異にしている。昭和2年度には、名古屋（県立第一高女講堂、7月23日～25日）、岡崎（岡崎三島小学校講堂、7月28日～30日）、大垣（県立大垣高女講堂、7月27日～29日）、大分（県立大分高女講堂、8月1日～3日）、新潟（市公会堂、8月9日～11日）、高田（高田第三小学校講堂、8月23日～25日）、姫路（姫路城南小学校講堂、8月25日～26日）、大阪（大阪朝日会館、9月7日～8日）の計8カ所で大谷大学講座を実施し、いずれの会場も200～300名（名古屋のみ600名）の聴衆を集めた。経費については、各地100～260円の学校補助が出ており（8カ所で計1340円の学校補助）、不足分は地方同窓学生の負担であった。「実施状況」には講座のタイトルが掲載されておらず、内容は不明であるが、講師は真宗学や仏教学の教授が多く担当しており、伝道色が強かったと考えて良いだろう。昭和初期の大谷大学は全国各地でこのような講座を開設していたことが知られている（大谷大学百年史編集委員会2001、pp.678-679）。

4. 慶應海外医事研究会通俗医学講座

（1）北里柴三郎の功績

明治・大正期の大学拡張を語るにあたり、菊池大麓と家永豊吉は欠かせない。菊池は東京大学理学部長（帝国大学改組後は理科大学長）、東京帝国大学総長、そして京都帝国大学総長を歴任し、東京では大学における通俗講談会の嚆矢である理医学講談会・大学通俗講談会を中心的に担い、京都では戦前最も組織的かつ継続的な大学拡張事業の一つと評価しうる夏期学術講演会をはじめた人物である。一方の家永はUniversity Extensionを大学普及と訳して日本に紹介し、東京専門学校（早稲田大学）にその礎を築いた人物である。片や官学、片や私学であり、実践の方向性は異なるもの

の、どちらも重要であり欠くことはできない。

この二人に加えて、もう一人、北里柴三郎も日本の大学拡張において重要な役割を果たした人物であると考えられる。ただし、北里が菊池・家永と決定的に異なるのは、大学等の高等教育機関ではなく、長く伝染病研究所や北里研究所といった研究所に所属していた人物であるという点である（北里が慶應義塾大学医学科長になったのは大正6年、66歳のことである）。しかし、北里が伝染病研究所で実施した講習は、同研究所が東京帝国大学の所管となった後も引き継がれたことで、講習会タイプの大学拡張事業としては戦前最も長く続いた取組となり、また、北里のもと伝染病研究所、北里研究所で働いていた宮島幹之助が慶應義塾大学医学部ではじめたのが、通俗講談会タイプの大学拡張事業として同様に戦前長く続いた海外医事研究会の通俗医学講座である。北里の功績は極めて大きい。

そもそも、大学拡張にかかる私学の取組で言及されるのはもっぱら東京専門学校（早稲田大学）の講義録であり、慶應義塾が上げられる場合はあっても明治初期からの三田演説館であって、海外医事研究会について触れられることはほとんどない。そして、それはまた、東京帝国大学をはじめとする帝大系医科大学が実施していた医師対象の医学講習科とも内容を異にするものである。慶應義塾大学医学部が当時どのような大学拡張の取組を実施していたか、それを明らかにすることは意義あることである。

（2）伝染病研究所、北里研究所、慶應義塾大学医学部の系譜

宮島幹之助および慶應海外医事研究会について述べる前に、その前提として、やや長くなるが北里柴三郎の取組について確認しておこう。

北里がドイツ留学から帰朝後、彼の研究を支援するため、福沢諭吉および森村市左衛門らの援助により伝染病研究所が設置された（明治25年、北里が研究所長を務める）。北里は東京大学医学部卒（明治16年）で慶應義塾の出身ではないが、慶應と深い関係が形成されるようになったのはこのような事情による。伝染病研究所は当初大日本私立衛生会の附属研究所であったが、その後明治32年に内務省に引きつがれ国立の研究所となった。

伝染病研究所は、大日本私立衛生会時代の明治27年に医術開業免状所有者を対象に3ヶ月一期の研究生を受け入れ始め、これが昭和戦前期まで50年続く同研究所の講習の形式となった。内務省に移管されるまでに計17回募集され450人の研究生が学んだが（宮島・高野編1932、p.80）、さらに内務省傘下となると、伝染病研究所官制（明治32年3月31日公布、同年4月1日施行）の第二条に「伝染病研究所ハ内務大臣ノ管理ニ属シ伝染病其ノ他病原ノ検索、予防治療方法ノ研究、予防消毒治療材料ノ検査及伝染病研究方法ノ講習ニ関スル事務ヲ掌ル」と講習の実施が明記され、同年10月には伝染病研究所講習規程も制定された。かくして明治32年に改めて第1回講習が開催され、以後毎年2～3回講習が行われた。

内務省伝染病研究所である限りこの講習が「大学拡張」と捉えられることはない。しかし、第二次大隈重信内閣時代に所謂「伝研移管問題」が起こる。伝染病研究所は大正3年に内務省から文部

省へ移管、大正5年東京帝大の附置研究所となったのである。そして、大学附置研究所となって以後も昭和18年の第92回まで講習は継続された。伝染病研究所の講習は講習会型の大学拡張事業として戦前最も長く継続した取組であるが、大学ではない組織で北里がはじめたものを東京帝大が吸収したものであった。

ただし、この内務省から文部省への移管は政府首脳部が極秘裡に決めたことで、北里は一切相談されていなかった。北里としては「寝首をかかれたと等しき仕儀に逢ふた」（同上、p.83）わけで、これを不満として北里本人および技師一同は伝染病研究所を一斉に辞職した。そして大正3年11月、北里の私財を投じて北里研究所を新たに設置し、元の伝染病研究所のメンバーによって陣容を整えた。そして、創立直後の大正3年12月には、毎週火・金曜日、夜間2時間ずつ合計20回の補修講習会が開催され（翌大正4年2月まで）、300名超の聴講者が集まった（北里研究所1916、p.28）。この補修講習会は日新医学社編『北里研究所補修講演録』として出版されたが、元の伝染病研究所のメンバーによる講習である以上、下記の序文は決して過言ではないだろう。

日新医学社が、創立以来鋭意鼓吹せる医学補習教育の必要は、近時一般の認容する所となり、今や各医科大学及医学専門学校等に於ては、争ふて講習会若くは補修講演会を開きて、医学補習教育の実を挙げんとするに至れり。是、時運の齎せる貴重なる賜として、吾人の感謝せざるべからざるものなり。而して此種講演会中、最完備して理想的且模範的なものを、客臘来北里研究所によりて開催せられたる講演会となす（日新医学社 1915、序）。

大正4年10月からは細菌学及伝染病学講習会も開始された。臨床細菌学、伝染病学、免疫学、熱帯病学、寄生虫学及び化学療法等についての3ヶ月間の講習であり、春期（1月上旬から3月下旬）と冬期（10月上旬から12月下旬）に年2回実施することになったのである（北里研究所1916、p.30）。これは後に年1回に減じるが、大正4年の第1回講習から昭和14年の第46回講習まで1037名が修了したという（北里研究所1939、p.38）。

ところで、伝染病研究所も北里研究所も医学校ではなく、あくまでも研究所である（北里研究所が北里大学を開学するのは昭和37年のことである）。北里は慶應義塾に医学校を設置するよう説いていたのだが、それには膨大な資金を必要とするため実現は容易ではなかった。しかし、第一次世界大戦の影響で理工科を設置する議が起きた際、「博士北里を擁する慶應義塾は、何故に先づ医科の設置に着眼せざるか」（宮島・高野編1932、p.99）という意見が続出し、理工科ではなく医学科を創設することとなった。大正6年、慶應義塾大学部医学科が誕生、北里が初代科長に就任し、北里研究所の北島多一、志賀潔、秦左八郎、宮島幹之助等々を教授として就任させた（大正9年、大学令による大学となり、慶應義塾大学医学部となる）。明治25年創設の伝染病研究所の正系は、北里研究所を経て慶應義塾大学医学部へと繋がったのである。

(3) 宮島幹之助と慶應海外医事研究会

慶應義塾大学が医学部及附属病院の開校開院式を開催したのは大正9年11月6日であるが、翌々の11月8日には慶應医学会の開会晩餐会が開かれた。その席上、塾長の鎌田栄吉は医学部の社会貢献について次のように述べている。

この医学部と云ふものが、克く其効果を挙げ、啻に生徒を教育し病人を治療するのみならず、広く社会に向って貢献すると云ふ事を図らなければならぬ。大学としては無論学問の蘊奥を極め又智識の妙諦を穿つと云ふ事に大に努めなければならぬのであることは申す迄もないのであります。併しながら、又之が効果を広く社会に及ぼすと云ふ事も亦図らなければならぬのである。第一社会に向って貢献する処の重要な点としては世間に在る開業医の進歩向上を図る上に成るべく裨益すると云ふことである。此の開業医と云ふものは、社会に最も必要な最も大切なものである。而して、大家名医も少くはないが併し乍ら多くの医家は、唯平生業務に多忙なるが為に新智識を得或は新実験を得ると云ふ事の機会を逸する。又そう云ふ倚るべき研究処が少ない為に知らず識らず世の進歩に遅れると云ふ事が免れない。之は為に成るべく研究の便宜を与へ、又新智識を分布すると云ふ事が大切である。夫れに就いても、陳列所とか図書館と云ふ様なものは之を学校内の者許りではなく広く開放して医界の為に便宜を与へる事にしたいと思ふ。

夫れからして又夫れは専門家に対する事でありますけれども其以外一般公衆にも衛生の智識を与へるべく努力するのが、学校の義務の一つであると思ふ。所謂ユニヴァーシティー・エクステンションと云ふものは夫等の点に於て大に効果を奏する事であると思ふ（鎌田 1920、pp.5-6）。

鎌田はここで医学部の社会貢献として、第一に専門家である医師に対する新知識の教授（あわせて施設の開放）、第二に一般公衆に対する衛生知識の教授、この2つの方向があると述べている。

北里も同様の考えを持っていたようである。伝染病研究所、北里研究所で行っていた講習はいずれも医師に対するものであったが、『北里柴三郎伝』に「先生は又平素「凡そ学識は俗間に普ねからざれば其の功德大ならず。学者の知識益々高尚なるも、俗間を距ること愈々遠き時は何の用をか為さん。殊に人生日常の医事衛生に於てをや。學術と生活との密接なる媒介者たる亦実に学者の天職なり」との持論より、機会ある毎に學術の通俗化を図り、時間の許す限り是等講演の依頼を快諾して、遠く地方に赴くを辞さなかった。又「伝染病予防撲滅法」、「肺の健康法」其の他数種の通俗著書をも刊行し、所謂実学の効用を発揮するに力めた」（宮島・高野編1932、p.122）とあるとおり、一般公衆に向けての取組も重視していたことがわかる。

後者の一般公衆向けの取組を大学内で実践したのが慶應海外医事研究会の通俗医学講座であり、会長を務めた宮島幹之助である¹⁰⁾。

（東京）帝国大学理科大学動物学科で筑作佳吉の下学んだ宮島は、当初京都帝国大学医科大学講師となり寄生虫学を担当したが、その後伝染病研究所に入所、伝研移管問題が起きた際には北里に

殉じて辞職し、北里研究所、慶應義塾大学医学部において「北里の片腕」となった人物である¹¹⁾。ツツガムシやマラリアを研究しており、海外とりわけ熱帯地方に派遣されることが多く、「国際連盟の麻薬委員日本代表を勤め、国会議員になったこともあり、年の半分はジュネーブに出張、外務省役職に在ることが多く視野も広い人物であった」（慶應義塾大学医学部六十周年記念誌編集委員会1983、p.38）。そのような背景から、宮島には専門の寄生虫学に関する論文のほか、「国民の海外発展と防疫医学」（『大日本私立衛生会雑誌』33（387）、1915年）、『熱帯生活』（南洋協会・日本之医界社、1919年）、「海外移住地の衛生」（日本移民協会編『海外移住』、1923年）など、海外生活と医学・衛生に関するものも多く見られる。

慶應義塾大学医学部に海外医事研究会が設立されたのは大正9年であるが（慶應義塾大学医学部1931、p.39）、設立の詳しい経緯は不明である。おそらく、海外移住が増えているという当時の社会情勢と、国際人としての宮島の関心が合致して誕生したものであろう。

（４）通俗医学講座、地方講演会

海外医事研究会の事業は、『慶應義塾大学医学部十周年記念誌』および『慶應義塾大学医学部二十周年記念誌』の記事から、おおむね、①語学の研究、②通俗医学講座および地方講演会の開催¹²⁾、③国際親善および大陸学生派遣・医師就職紹介、に大別することができる。①は英語、ドイツ語、フランス語、中国語等の研究で、海外の医学および一般事情に通暁するためであり、③は東アジアおよび東南アジア（満、支、印、南）の学生との交流、および学生・医師の大陸就職や見学の紹介である。設立初期は①②が主であったのが、昭和期になると次第に③に力が注がれたようである。

さて、②の通俗医学講座は海外医事研究会設立初期からの事業であり、第一回は大正13年夏に医学部内にて開催された。目的は最新医学知識普及のためであり、広く各科を網羅する内容であった。翌大正14年からは医学教育機関なき都市において最新医学知識の普及を計るため地方でも実施されるようになった。地方講演会は当該県の衛生課や医師会、新聞社等の後援の下に行われた。

では、ここで通俗医学講座および地方講演会がどのような内容であったか、大正13年から昭和2年までについて、『三田評論』に掲載された記事をもとに具体的に見てみよう（ただし大正15年の第二回地方講演会については『三田評論』に記事がなく不明）。

[大正 13 年]

・ 第一回通俗医学講座（大正 13 年 7 月 21 日～27 日、毎日午前 8 時から 3 時間、医学部内）

講師及科目

内科	伝染病と家庭衛生	医学博士 平井 文雄
小児科	夏の小児病と其の手当、哺乳児及小児の衛生	医学博士 鎮目専之助
婦人科	不妊症	医学博士 川添 正道
病理学	癌	医学博士 川上 漸

精神科	医学上より見たる婦人の地位	医学博士	植松七九郎
眼科	色盲と遺伝		川上 理一
外科	骨折の手当	医学博士	前田 友助
耳鼻科	耳鼻咽喉疾患の学齢児童に及す影響	医学博士	小此木修三
栄養学	栄養価		高比良英雄
病理化学	日本人の白米病	医学博士	田口 勝太
整形外科	歩行不自由と小児麻痺	医学博士	桂 秀三
歯科	家庭と口腔衛生	ドクトル	岡田 満
皮膚科	性病に就て	医学博士	笹川 正男
衛生学	社会衛生問題	医学博士	高野 六郎
特別講演	フランス病院を通して見たる虚弱児童の育強事業	医学博士	茂木藏之助
特別講演	夏草		正木不如丘

(『三田評論』第324号、大正13年8月1日、p.28)

[大正14年]

・第二回通俗医学講座(大正14年7月20日～26日、毎日午前8時から正午まで、医学部内)

講師及演題

挨拶		会長・医学博士	宮島幹之助
挨拶		時事新報主筆	板倉 卓造
内科	脚気の原因とその療法	医学博士	大森 憲太
薬物	植物性神経と薬物	医学博士	宮崎 三郎
整形外科	足	医学博士	桂 秀三
眼科	眼の屈折異常に就きて	医学博士	菅沼 定男
法医学	血液による親子の鑑別	医学博士	田口 勝太
精神科	ヒステリー質と神経質	医学博士	下田 光造
歯科	顔面美と歯牙	ドクトル	岡田 満
産婦人科	婦人病と他病との関係	医学博士	川添 正道
耳鼻咽喉科	難聴に就て	医学博士	小此木修三
病理	疾病と年齢との見解	医学博士	川上 漸
特別講演	不減衰学説の通俗的解説	医学博士	加藤 元一
小児科	小児期の二三重要疾病に就て、附転地と避暑、山か海か	医学博士	鎮目専之助

学部及病院見学

皮膚科	皮膚の疾病	医学博士	笹川 正男
衛生	文化と社会衛生	医学博士	高野 六郎
理学科	温泉の話	医学博士	藤浪 剛一

特別講演 生命の相

正木不如丘

- ・第一回地方講演会（大正 14 年 7 月 13 日～17 日、毎日午後 1 時より、水戸市、茨城県医師会水戸市医師会及「いばらき」新聞社後援）

講師及演題

生殖腺の内分泌	医学博士	植松七九郎
治癒し得べき畸形	医学博士	桂 秀三
結核治療法研究の進境	医学博士	田口 勝太
ビタミン問題に就て	医学博士	大森 憲太
泌尿器科学より見たる公衆衛生	医学博士	北川 正淳
文化と衛生	医学博士	高野 六郎
婦人病の原因	医学博士	川添 正道
夏の小児病と其手当	医学博士	鎮目専之助
栄養問題に関する二三の考察	医学博士	高比良英雄
医学と植民政策	医学博士	宮島幹之助

（『三田評論』第 336 号、大正 14 年 8 月 1 日、pp.26-27）

[大正 15 年]

- ・第三回通俗医学講座「小児保健に関する講座」（大正 15 年 7 月 20 日～26 日、毎日午前 8 時から正午まで、医学部内）

講師及演題

開会ノ辞	会長・医学博士	宮島幹之助
挨拶		時事新報社代表
児童保護	内務省衛生局予防課長・医学博士	高野 六郎
子供ノ眼病	医学博士	菅沼 定男
	医学博士	川上 理一
小児期ニ罹り易キ二三ノ耳鼻咽喉科疾患ニ就テ	医学博士	小此木修三
滋養剤ニ就テ	医学博士	阿部 勝馬
特別講演 生キタル美	医学博士	正木 俊二
疫病ノ病理	医学博士	川上 漸
夏期ニ於ケル小児消化不良、其ノ他二三ノ疾患ニ就テ	医学博士	岩井 眞金
初生児ノ状態	医学博士	川添 正道
蛔虫ト蟯虫	理学博士	小泉 丹
医者トシテ小児観察	医学博士	唐澤 光徳
	医学士	秋場 隆一
ヂフテリーニ就テ	医学博士	秦 佐八郎

誤ラレ易キ育児法ト其ノ實際	医学博士	鎮目專之助
寝小便ノ話	医学博士	植松七九郎
小児期ニ於ケル歯牙齲蝕ノ予防ト其ノ疾患ノ全身的影響ニ就テ		富取卯太治
小児皮膚病	医学博士	笹川 正男
子供ノ歩行異常	医学博士	前田 友助
子供ノ心ノ発達ト教育	文学部教授	小林 澄兄
不良少年少女ト家庭	警視庁技師	金子 準二
閉会ノ辞	本会顧問・医学博士	藤浪 剛一

(『三田評論』第348号、大正15年8月1日、p.27)

[昭和2年]

・第四回通俗医学講座「青年期に必要な医学的知識」(昭和2年7月20日～26日、毎日午前8時から正午まで、医学部内)

講師及演題

開会之辞	会長・医学博士	宮島幹之助
脚気原因の文化的考察	医学博士	大森 憲太
妊娠と月経	医学博士	堤 辰郎
健康なる子孫を得る者の心	医学博士	鎮目專之助
青年期の男女を侵す眼結核	医学博士	菅沼 定男
青年時代と歯の悩み	ドクター・オブ・デンタルサーゼリー	岡田 満
蓄膿症	医学博士	小此木修三
運動に依って起る骨折の話	医学博士	前田 友助
減衰学説と不減衰学説(科外講演)	医学博士	加藤 元一
青年期に多い急性伝染病	医学博士	大谷 彬亮
青年と結核	医学博士	平井 文雄
海外発展と医学	理学博士	小泉 丹
性病の害毒	医学博士	笹川 正男
(性病予防に関する活動写真)	医学博士	北川 正惇
人生と乳酸菌	医学博士	小林 六造
神経衰弱	医学博士	植松七九郎
栄養に関する各種宣伝の批判	医学博士	照内 豊
青年期の性的犯罪	警視庁技師	金子 準二
性病予防問題	医学博士	高野 六郎
閉会之辞	顧問・医学博士	藤浪 剛一

・ 第三回地方講演会（昭和2年7月25日～27日、静岡市衛生組合主催、静岡商品陳列所階上）

講師及演題

開会之辞

市衛生組合長 佐橋 良彦

会長・医学博士 宮島幹之助

口腔衛生

ドクター・オブ・デンタルサーゼリー 岡田 満

乳児幼児児童の看護及衛生附疫病

医学博士 内村 良二

栄養問題上より見たる日常食膳の改善

医学博士 照内 豊

母となる可きものの心得附性病の害毒

医学博士 堤 辰郎

結核

医学博士 大谷 彬亮

都市に於ける糞尿及塵芥処分問題

医学博士 高野 六郎

閉会之辞

顧問・医学博士 藤浪 剛一

（『三田評論』第360号、昭和2年8月1日、pp.45-46）

ところで、昭和2年の第四回通俗医学講座の聴講者は男性35名、女性27名の計62名であり（文部省普通学務局「実施状況」より）、昭和8年の第十回も聴講者は60余名であったのだが（『三田評論』第433号、p.28）、その後年々聴講生数が増え、昭和15年の第十七回には500名に達したという（慶應義塾大学医学部1940、p.77）。『日本医学及健康保険』（第3242号）に掲載されている昭和16年第十八回の予告記事にも定員400名と書かれている（因みに、会費は昭和2年が3円、昭和16年が3円50銭とそれほど変わっていない）。

「実施状況」で分かるとおり、昭和2年の時点で通俗医学講座の聴講者男女比は他大学等の拡張事業に比べ女性比率が高いのだが、昭和10年代半ばには「殊に此講演会は女の方が多いのでありまして、大部分は女性の方でございます」と、女性が大半だったことがわかっている。この発言は昭和16年第十八回通俗医学講座に際しての北島多一医学部長の挨拶であるが、これに続く言葉は次のとおりである。

かういふ時局柄色々世中の模様も変って参りまして、外では戦をして居ると云ふ状態でありまして、かういふ時局を乗切っていくのに、男の人は外で活動しなければならないが、御婦人方も亦家に居って色々援助して行かなければならぬのでありまして、それには矢張り女の方も同じやうに活動して戴かなければならぬと思ふのであります（日新治療社編 1943、p.1）。

これは真珠湾攻撃まで5ヶ月を切っている時分の発言であるが、前々年の第十六回、前年の第十七回の講義録にも、冒頭に「銃後と医学の普及 銃後のつとめは、第一に明るい、健康な家庭をつくり、第二の国民の体位を向上させるにある。そのために、何よりも必要なことは、正しい医学の知識を普及させることである。「銃後の護りは、医学の普及から」でなければならぬ」（海外医事研究会1939、宮島・林監修1940）という北島の言葉が掲げられている。講座開始当初の最新医学知識の普及という目的から、銃後の守りのための女性の医学知識の向上という目的に変質してきたこ

とが見える。

慶應海外医事研究会の通俗医学講座および地方講演会は、『三田評論』で確認できる限り、昭和16年の第十八回通俗医学講座、第十七回地方講演会（盛岡市）まで継続的に実施されたが、その後は不明である¹³⁾。

5. おわりに

本稿では、文部省普通学務局『成人教育実施概要：昭和三年度』に掲載された「実施状況」を手がかりに、私立高等教育機関が戦前実施していた多様な拡張事業の一端を明らかにした。文部省委嘱ではなく自主的に実施した私学の拡張事業には、官立校との共通性がある一方、仏教系私学が伝統として行ってきた伝道を拡張事業として実施する取組は私学ならではのものであった。また、あわせて本稿では、従来ほとんど言及されることのなかった北里柴三郎の大学拡張に対する功績および慶應義塾大学医学部の取組も明らかにした。

もとより本稿で取り上げたのは私学で展開された拡張事業の一部にすぎない。引き続き研究を進めたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP16K04554の助成を受けたものである。

注

¹⁾ 列举された56校のうち3校について補足が必要である。①官立実業専門学校の鳥取高等農業学校（鳥取高農と略）は、原文では鳥取高等工業学校になっている。しかし、当時鳥取高等工業学校は存在せず、また、講師職氏名欄の「本校教授」は鳥取高等農業学校に在籍中だったことから、表1では鳥取高農に修正した。②東洋大学は、名称こそ大学を名乗っていたものの、昭和2年度の段階では法令上は専門学校令に基づく専門学校であった（昭和3年4月大学令による大学設立認可）。しかし、原文では掲載順上明らかに大学扱いされている。学校拡張事業実施概要は昭和2年度のデータであるが、本データを含む『成人教育実施概要：昭和三年度』は昭和4年4月に発行されており、そのタイムラグのためこのような扱いになったのであろう。表1では、本来あるべき専門学校に分類した。③掲載された56校中55校は戦後に新制大学となり後身校が存在するが、昭和22年に大日本武徳会武道専門学校は廃校となり、戦後に継承されなかった。

²⁾ 官立実業専門学校における拡張事業については、例えば山本（2008）を参照のこと。

³⁾ 拙稿（博士学位論文）の分類による。

⁴⁾ 講義録および校外教育部については、『早稲田大学百年史』第一巻～第三巻、および、田中征男『大学拡張運動の歴史的研究：明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』に詳しい。なお、表2の早稲田大学の拡張事業のうち3番目の記念公開講演会は、昭和2年に行われた特別行事、すなわち、創立45周年と大隈記念講堂竣工祝いを兼ねた記念祝典（昭和2年10月19日～24日）の一部であった。『早稲田大学百年史』第三巻に、「またこの日（筆者注：10月20日）から二十二日まで三日間、記念大講堂で左の如く学苑諸学科担当の権威を網羅した記念大講演

会を開催、学苑の学生は勿論、都下各大学の学生および一般の聴講者で連日満員の盛況であった」(p.252)と記されている。

- 5) 昭和2年度は、7月23日～30日、講習は午前7時から正午迄(計40時間)、講演(6回)は午後7時開始、聴講者185名(男性142名、女性43名)、入会申込金2円、聴講料5円。青山学院の英語講習会は、大正14年秋、青山学院教職員有志がハリス館に会合し、欧米視察旅行から帰朝した岡田哲蔵から土産話を聞いた際、岡田が「英国オックスフォード大学に於て夏期大学に出席せられ、メースフィールド其他知名の人々より直接其作品の朗読や講義などを聴かれた事を話され、若し青山学院に於ても復興建築も略完成せる今日、是等の新校舎を利用して同様の催をなしたるならば、非常に有益の事なるべしとの意見を述べられた」(村上1932、p.297)ことがきっかけとなり、大正15年に第一回が開始された。
- 6) 昭和2年度は、8月1日～3日、午前8時から11時まで、校長の渡邊滋が担当し、女性30名が聴講した。東京女子専門学校は渡邊辰五郎(渡邊滋の父)が創立した和洋裁縫伝習所(のち東京裁縫女学校)を前身とする。東京女子専門学校では、大正13年から14年にかけて、『裁縫全書:専門教育』(児童洋服の部、単衣の部、東帯及び五衣の部、男子洋服の部、高級裁縫及雑の部)を刊行していた。
- 7) 昭和2年度は、9月3日から7日間、午前9時から午後4時までの計42時間、校長の結城林蔵ほか11名が担当し、46名(男性45名、女性1名)が受講した。受講生は講習生(15円、男女36名)と聴講生(7円50銭、男性10名)に分かれていた。『東京写真専門学校一覧:昭和11年至12年』に掲載された沿革によれば、東京写真専門学校は大正12年に小西写真専門学校として設立されたが(大正15年改称)、翌大正13年9月2日に「本日ヨリ一週間第九回夏期写真講習会会場トシテ本校ノ一部ヲ貸与ス」(p.5)とある。以後、昭和4年の第十四回の講習会まで同様に校舎の一部を貸すと書かれてある(昭和5年からは講習会そのものの記載がなくなる)。おそらく、大正5年頃から行われていた夏期写真講習会を小西(東京)写真専門学校で実施することとなったのであろうが、詳細は不明である。
- 8) 立正大学の取組は他の仏教系私学とは異質であるが、これは次のような事情による。大正13年に大学令による設立が認可された立正大学は、発足当時、研究科・学部・予科から構成されたが、翌大正14年には旧日蓮宗大学を立正大学専門部と改称し、教職員養成機関としての専門部(夜間)が誕生した。専門部は当初宗教科、国語漢文科、歴史地理科の3科であったが、大正15年には後2者を併せて中等教員養成を目的とする高等師範科とし、その中に国語漢文科と歴史地理科を含む形となった。専門部には大学の学部学生をはるかに上回る数の学生が所属し、中等教員を数多く輩出していた(大学史編纂委員会1992、pp.55-56)。立正大学の実施する歴史地理科講習会および国語漢文科講習会は専門部高等師範科に対応しており、その目的は「中等教員試験受験者及該科研究者並ニ本学専門部学生ノ学力ヲ補充ノタメ」(文部省普通学務局1929、pp.201-202)であった。昭和2年度は、夏期が7月31日～8月5日、各科35時間、冬期は12月25日～30日、各科30時間で、講師は立正大学教授のみならず、東京帝国大学や東京高等師範学校、学習院からも招いていた。また、会費は7円(ただし本学学生は4円)であった。
- 9) 大正11年に大学令による設立を認可された大谷大学には、大正12年7月1日から施行された大谷大学々友会規則(同窓ノ部)がある。その第25条は同会の事業に関する規定であり「三 巡回大学、夏季大学ノ開催」という文言が見られる(大谷大学1927、p.109)。本文で紹介した事例と、学友会規則の巡回大学あるいは夏季大学が同一のものかどうか、本稿執筆時点では断言できず、今後調査が必要である。ただし、学友会規則中、事業として巡回大学、夏季大学が規定されていることは興味深く、ここに指摘しておきたい。
- 10) 宮島は大正9年の慶應海外医事研究会設立から、昭和15年加藤元一に後任を託して顧問となるまで、20年にわたり会長を務めた(『醫海時報』第2378号、昭和15年4月6日、p.42)。
- 11) 宮島は東京帝大出身ではあるものの「常に学生への訓辞の時は伝研移管問題を説き、日本の官僚、官立大学の独善、陰険を批難し、慶應医学は東大に追いつき追い越せと、慶應医学部学生の勤勉努力並に団結を強調した」(慶應義塾大学医学部六十周年記念誌編集委員会1983、p.38)という。
- 12) 医学部内で開催される通俗医学講座はこの名称が一貫して使用されているが、地方会場で実施するものについては講演会、講習会、講座が使われており、特定の名称が存在しない。
- 13) 昭和16年の実施状況は、『三田評論』第527号(昭和16年9月1日、p.54)に掲載されているが、翌年は記事がそもそもなく不明である。

参考文献

大谷大学『大谷大学要覧 昭和2年9月1日調』1927年

大谷大学百年史編集委員会『大谷大学百年史 資料編』2001年

鎌田栄吉「慶應医学部経営方針（慶應医学会開会晩餐会に於て）」『三田評論』第281号、1920年、pp.1-12

北里研究所『北里研究所一覧：再版』1916年

北里研究所『北里研究所一覧：5版』1939年

慶應海外医事研究会『明るい家庭医学』春秋社、1939年

慶應義塾大学医学部『慶應義塾大学医学部十周年記念誌』1931年

慶應義塾大学医学部『慶應義塾大学医学部二十周年記念誌』1940年

慶應義塾大学医学部六十周年記念誌編集委員会『慶應義塾大学医学部六十周年記念誌』1983年

高野山大学百年史編纂室『高野山大学百年史』1986年

大学史編纂委員会『立正大学の百二十年』立正大学学園、1992年

田中征男『大学拡張運動の歴史的研究：明治・大正期の「開かれた大学」の思想と実践』野間教育研究所、1978年

日新医学社編『北里研究所補修講演録』1915年

日新治療社編『日新治療社叢書第二十三編：厚生医学編』1943年

乗杉嘉壽『社会教育の研究』同文館、1923年

仏教大学史編纂委員会『仏教大学史』1972年

文部省普通学務局『成人教育実施概要：昭和三年度』1929年

宮島幹之助・高野六郎編『北里柴三郎伝』北里研究所、1932年

宮島幹之助・林籾監修『教養としての家庭医学』春秋社、1940年

村上精一「英語夏期講習会誌」、青山学院五十年史編纂委員会『青山学院五十年史』1932年、pp.297-300

山本珠美「地方都市における旧制専門学校の開放事業：高松高等商業学校を例に」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』2号、2008年、pp.1-24

山本珠美『官立高等教育機関における「大学拡張」の歴史的研究—明治期から戦後初期までの日本型大学拡張の成立・展開過程をめぐる考察—』（2018年度博士学位論文）

龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史 通史編 上巻』2000年

早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史 第1～3巻』早稲田大学出版部、1978-1987年